トールマン（Tolman, E.C.）とホンジック（Honzik, C.H.）による潜在学習の実験に関する記述として妥当なのはどれか。

1．ネズミに迷路を報酬なしで探索させると，当初は報酬ありの統制群に比べて遂行成績は伸びなかったが，報酬を導入した途端に遂行が急激に改善した。

2．踏み板を踏むかひもに触れるかするとドアが開く仕組みの箱にネコを入れると，初めのうちは偶然に脱出するが，徐々に効率よくドアを開いて脱出できるようになった。

3．回避不可能な状況で電気ショックを与え続けられたイヌが，回避可能な状況において，自ら電気ショックから逃れようとせずうずくまったままであった。

4．アカゲザルに対し同じタイプの弁別学習を行う課題を複数連続して取り組ませると，最初はチャンス・レベルであった正答率が漸進的に上昇し，最終段階ではほぼ完全正解に達した。

5．チンパンジーが箱や棒がばらばらに置かれた檻（おり）の中で，箱を押すなどの行動レパートリーを組み合わせることによって，天井につるされたバナナを試行錯誤によらず取ることができた。

〔正答番号〕1

アッシュ（Asch, S.E.）は，架空の人物の特徴をいくつかの特性語によって提示し，そこから印象を形成させるという手続による一連の実験を行った。この実験に関する次の記述ア～エのうちには妥当なものが二つある。それらはどれか。

ア．初めの方に提示された特性語が最終的に形成される印象に大きな影響を及ぼすという新近効果を見いだした。

イ．個々の情報に基づく印象が寄せ集まって全体的印象ができるのではないことを示した。

ウ．同じ特性を組み合わせて人物を記述する場合，その提示順序を変化させても同じような印象が形成されることを明らかにした。

エ．同じ特性語であっても，他に提示される特性語が異なると，その文脈によって意味が変わることを示した。

1．ア，イ
2．ア，エ
3．イ，ウ
4．イ，エ
5．ウ，エ

〔正答番号〕4